

News Release
ポーラ美術館・報道資料

印象派の行方

モネ、ルノワールと次世代の画家たち

2012. 1.21[土]—7.8[日]



 ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART

【報道に関するお問い合わせは】 ポーラ美術館 広報事務局 担当: 増田、小椋、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316
ポーラ美術館 学芸部広報担当: 比良田(ひらた) Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108

概要

自然や都市に身を投じ、自らの眼に映る世界を明るい色彩で生き生きと描き出した、フランス印象派の画家たち。そのグループとしての活動は長くは続かず、1870-1880年代の10年余り、計8回の展覧会をもって終焉を迎えます。しかし、彼らの試みの波紋は大きく、同時期のセザンヌやゴーガン、スーラの革新的な絵画も、印象派の内部や周辺から生まれたものでした。

印象派の画家のなかでも、20世紀へといたる長い画業の最後まで探究を続けたのが、モネとルノワールです。ふたりの画家は19世紀末に評価を確かなものとしますが、老境に入ってもなお食欲に制作に取り組むなかで、ボナールやマティス、ピカソら、新進の前衛画家の称賛を受けていたことは、あまり知られていません。このことは、モネとルノワールの画業のたゆまぬ発展を物語ると同時に、印象派に対する後年の評価を考えるうえで、興味深い事実です。

モネとルノワールは印象派展以後、どのように画業を展開していったのか―。20世紀の画家たちは、ふたりの先達に何を見出ししていたのか―。約60点の展覧作品により、次世代のまなざしから見てくる「印象派の行方」をうかがえます。

印象派の行方―モネ、ルノワールと次世代の画家たち

【会期】 2012年1月21日(土)―7月8日(日) 会期中無休

【主催】 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館

【会場】 ポーラ美術館 展示室1 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)

Tel : 0460-84-2111 / Fax: 0460-84-3108 / HP: <http://www.polamuseum.or.jp>

【出品点数】 64点(展示替え含む)

【出品作家】 クロード・モネ、ピエール・オーギュスト・ルノワール、カミーユ・ピサロ、ジョルジュ・スーラ、ポール・シニャック、ポール・ゴーガン、オディロン・ルドン、ポール・セザンヌ、アンリ・エドモン・クロス、モーリス・ド・ヴラマンク、オーギュスト・エルバン、ジョルジュ・ブラック、アルベール・マルケ、ピエール・ボナール、アンリ・マティス、パブロ・ピカソ

【開館時間】 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

【休館日】 会期中無休

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

第1部 1886年 - ゆらぐ印象派

1874年に最初の展覧会を開催した印象派は、その後、数年で曲がり角を迎えます。ルノワールとモネが相次いで、国家の運営する公募展であるサロンに出品したのです。そもそも、サロンの価値観に反発する画家の集まりであった印象派にとって、それらは存在意義を揺さぶられる出来事でした。モネとルノワールを欠いた印象派は、ピサロとドガを中心に、参加者を変えながら展覧会の存続を目指していきます。

1886年の第8回展に初めて参加したのが、若いスーラとシニャックでした。彼らは、印象派の手早く描かれた画面に秩序をもたらすべく、色彩理論に基づいた純色の点描による絵画を出品します。彼らの出現が、印象派の芸術の刷新を意味していることは明らかで、スーラとシニャックらは「新印象派」と呼ばれるようになります。そして、彼らが世に出たこの機会をもって、印象派のグループ展は最後を迎えることになります。

印象派の芸術を見直す機運は、新印象派にとどまらず、象徴主義と結びついたゴーガンやルドン、そして、早々に印象派から離れたセザンヌによっても共有されていました。そして、モネとルノワールもまた、風景と人物という各々の主題をめぐって、探究を試みていたのです。

第1章 モネとルノワール



ピエール・オーギュスト・ルノワール 《ロバに乗ったアラブ人たち》 1881/1882年頃



クロード・モネ 《セーヌ河の日没、冬》 1880年



ジョルジュ・スーラ 《グランカンの干潮》 1885年



ポール・セザンヌ 《砂糖壺、梨とテーブルクロス》 1893-1894年

第2章 最後の印象派展をめぐる画家たち

第3章 セザンヌ

第2部 1900年以降 - 次世代のまなざし

モネは1890年代から、「積みわら」や「ルーアン大聖堂」をモチーフに、季節や時間帯ごとの光の調子をもたらす差異を、複数のキャンバスに描き分ける「連作」に着手します。この独創的な試みは大きな反響を呼び、20世紀に入って以降も、ロンドンやヴェネツィア、そして自邸の庭園へと展開していきます。しかし、移ろいゆくものを主題とするモネの芸術は、マティスやヴラマンクらのフォーヴィスムなど、画面の秩序を重視する同時期の絵画の傾向とは相対することになります。

一方で、印象派を離れた1880年代に古典主義へと向かったルノワールは、20世紀に入って以降、画家や画商たちのあいだで評価を高めていきます。そのなかには、ボナールやマティス、ピカソら、新たな絵画の可能性を追求する前衛の画家たちも含まれていました。古典にも通ずるその自在な筆致と堅固な構成、そして飽くなき探究の姿勢は、1919年に没してもなお、次世代の画家たちの敬意を集め続けたのです。

第1章 モネとフォーヴィスム

第2章 ボナール

第3章 マティスとルノワール

第4章 ピカソとルノワール



クロード・モネ 《国会議事堂、バラ色のシンフォニー》 1900年



ピエール・オーギュスト・ルノワール 《裸婦》



ピエール・オーギュスト・ルノワール 《水浴の後》 1915年



ピエール・ボナール 《浴槽、ブルーのハーモニー》 1917年頃

ルノワール 1 マチス×ルノワール



アンリ・マチス
1869-1954年

「レ・コレット」のルノワールとマチス
(1918年3月)
前列中央がルノワール、左がマチス

© Photo: George Besson, Archives Henri Matisse (D.R.)

マチスはカーニュのルノワールのもとに足繁く通い、自分の作品に対する意見を求めた時期があり、ルノワールが晩年に描いた裸婦を特に評価していた。

ルノワールの自邸「レ・コレット」へ

フォーヴィスムの画家として活躍した約10年後、48歳になったマチスは、南仏ニースに滞在し、その頃同じく南仏に居を構えていたルノワールを頻りに訪ねていた。マチスは、ルノワールとの面談について、妻に手紙で次のように伝えている。

「私はルノワールのところに行って、その主題にあらゆる部分が調和した、いくつもの素晴らしい絵画を見た」「私の描いているものを見せてもらえればうれしい、とルノワールが言ってくれた」

マチスがルノワールのもとを初めて訪れたのは、1917年のこと。ルノワールが没する1919年までの2年足らずの間、その訪問は判明しているだけでも16回を数えた。

マチスは後年、「最善を尽くさずには死ぬわけにはいかない」と、完成していると思われる作品にも手を入れ続けるルノワールの姿を涙交りに回想し、最晩年に描かれた裸婦を、「これまで描かれた裸婦の中で最も美しいもの」と、賛美してやまなかった。

ピエール・オーギュスト・ルノワール

1841-1919年



アンブローズ・ヴォーラル 《ピエール・オーギュスト・ルノワール》 1913年
© Photo RMN / Droits réservés / AMF / amanaimages

・印象派離脱後の活動

- 1878年 第4回印象派展に出品せずサロンへ応募。その後3年連続で出品
- 1881年 アルジェリアとイタリアへ旅行。古典主義へ関心を寄せる
- 1887年 古典主義の成果である《大水浴》を発表、批判を受ける
- 1892年 《ピアノを弾く少女たち》が国家買い上げ。デュラン＝リュエル画廊で大回顧展を開く
- 1904年 サロン・ドートヌヴで回顧展開催
- 1907年 地中海岸の町カーニュ＝シュール＝メールに自邸「レ・コレット」を構える
- 1919年 カーニュにて没

ルノワールってどんな人？！

人付き合いが良い、明るい人柄。晩年には後進の画家達の訪問が多く、ルノワールも快くそれを受け入れた。

クロード・モネ

1840-1926年



アンリ・マニユエル 《ジヴェルニーのアトリエで「睡蓮」の大装飾壁画の前に立つクロード・モネ》 1920年
© The Bridgeman Art Library / amanaimages

・印象派離脱後の活動

- 1880年代 ノルマンディーの海岸地域にしばしば滞在し、荒々しい自然を描く
- 1890年 ジヴェルニーに土地と邸宅を購入
- 1891年 積みわたりの連作による展覧会。成功を収める
- 1895年 ルーアン大聖堂の連作の展覧会
- 1914～26年 睡蓮の大装飾壁画を制作
- 1926年 ジヴェルニーで没

モネってどんな人？！

一人で制作することを好んだ。視力の衰えに苦しんだ最晩年は、国家に寄贈する「睡蓮」の大装飾壁画の制作にひたすら取り組んだ。

モネ 1 モネ×フォーヴィスム

激しい色遣いによりながらも画面の秩序を重視するマチスやドラン、ヴラマンクらフォーヴィスムの画家達にとって、霧をかけたような、混ざり合う色で構成されたモネの連作は、はかなく脆弱に映った。モネの芸術は、展覧会のたびに大きな反響を呼びながらも、同時代の美術の潮流の中で孤立を深めていく。



モーリス・ド・ヴラマンク 《シャトゥー》 1906年頃
© ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2011



クロード・モネ 《国会議事堂、バラ色のシンフォニー》 1900年

シニャック×モネ

モネ 2



ポール・シニャック 《オーセールの橋》 1902年

ポール・シニャック
1863-1935年

若きシニャックの感動

16歳でモネの個展を初めて訪れたシニャックは感動を覚えて、画家の道に進むことを決意。自分の作品を見てほしいと面会を申し入れ、1884年サン・ラザール駅前のホテルで二人は会う。

円熟期のシニャックの称賛

シニャックは1912年にパリで開かれたモネの「ヴェネツィア風景」の展覧会を訪れ、再び敬意に満ちた手紙を送っている。**「私はこれらの作品（『ヴェネツィア風景』のシリーズ）に対し、あなたの芸術の最も素晴らしい表現として、敬意を表します」**



クロード・モネ 《サルテ運河》 1908年

ピカソ×ルノワール

ルノワール 2

パブロ・ピカソ

1881-1973年

ルノワールと同じく人物を主題とする画家として、特に古典主義に向かって以降のルノワールを高く評価。実際に対面することはなかったものの、ルノワールの作品を生涯で7点所蔵していた。

古典への回帰

パリに出てきた1900年代初頭から、古典主義的なルノワールの作品を高く評価。キュビズムを経た1910年代半ばから再び関心を強め、以後、継続的に作品を購入する。ピカソはルノワールの没後すぐ、写真をもとに肖像を描く(図版参照)。これは身体が不自由になってもなお、制作に取り組み続けたルノワールに対する、敬意の表明であった。



パブロ・ピカソ 《ピエール・オーギュスト・ルノワールの肖像》(写真による) 1919-1920年
© Photo RMN / Jean-Gilles Berizzi / AMF / amanaimages
© 2011-Succession Pablo Picasso-SPDA(JAPAN)

ルノワール 3 ボナール×ルノワール



ブラッサイ 《ル・カネのピエール・ボナールのアトリエ》 1945年
© Photo RMN / Michèle Bellot / AMF / amanaimages

ピエール・ボナール

1867-1947年

左下に自作との交換によって得たルノワールの裸婦の小品が見える他、ピカソ、フェルメール、モネ、ゴッコン、スーラの絵葉書なども。

ルノワールの賛辞

1897年にある小説に描いたボナールの挿絵に、ルノワールが賛辞の手紙を送ったのが始まり。その後、ともにモンマルトル界隈に住んでいたふたりは、パリで交流するようになる。

地中海という主題

ボナールは、ルノワールの後を追うように南仏に拠点を求め、かつてルノワールが滞在したカンヌ近郊のル・カネに居を構えた。ボナールは晩年のルノワールから、**「美しくしなければならない」**と教えを受けた。地中海の強い光は、「美しくする」上で欠かせないものだった。

モネ 3 ボナール×モネ



《ジヴェルニーの庭のモネとボナール》 1926年頃 All rights reserved

ボナールが、モネを初めて訪ねたのは、1909年のこと。その翌年にボナールはモネの住むジヴェルニーの近くの町、ヴェルノネに滞在するようになり、1912年には邸宅「マルロット」を購入。

以後、両者は家を訪ねあい、制作中の作品を見せあうまでに交流を深める。特に、モネは制作中の「睡蓮」の大装飾壁画をボナールに見せ、意見を求めていたようである。